

二寸之度傳來既久故後之作令集解者妄名以為高麗尺而京商織造名一尺二寸五分之度曰鯨尺名一尺二寸者曰吳服尺○中略今則除京商外天下皆用一尺二寸五分者而奸商之術嚮故衣蔽裳者往々猶用一尺二寸者以欺貧窶愚庸之人可歎也俗間呼是尺曰加治介尺加治介俗語凍縮之義言寒凍而身縮也取以擬大寶大尺極為絕倒

〔皇國度制考上〕令の小尺は廣成宿禰の謂ゆる小量にて今の曲尺なる事を知り已に其本度を知ときは令の謂ゆる大尺は其小尺に二寸を加へたるなれば其度は乃小尺の百二十分を百分に刻める尺なりと云こと隨ひて思ひ定めらる斯て本文○雜に度地用大と有れど地を度るにのみ用ひしには非ず絹布の類も亦この尺を用ひたり是を以て今も曲尺の一尺二寸なる尺を吳服尺と云ひまた量地尺とも云傳へたり

鯨尺

〔書言字考節用集七器財〕魚鬚尺クツラ當曲尺一尺二寸五分者

〔古今要覽器財〕釋名

くぢらさしこの尺鯨鱈の鬚を以て造るがゆへなりしかれ今に竹木を以てつくるもの多くなれり

〔律原發揮〕鯨尺者以曲尺一尺二寸五分舊尺一尺二寸七分為一尺以鯨魚鬚制之故名

〔古今要覽器財〕鯨尺

くぢら尺のはじめ定かならず永承の鐵尺などをや始とすべき又高倉家所傳の裁縫尺もこの鐵尺とおなじ又按に和名類聚抄に竹量といふものみえたれど寸分をえるさずその裁縫具にのせたるをみればくぢら尺の事にやあらん

〔乳母草紙〕御ぞたちぬふ事いやしきわざにてあらず天照大神の御父母いざなぎいざなみのみことよりはじまりゑやういろあひなどの事はもんどくてんわうのきさきよりはじまり住吉へ御參りの時かのもものたちのにつきをたてまつり給ふ今のすみよしたちこれなりそれより